

1930年代における中国知識人の西洋理解 ジャーナリスト鄒韜奮の欧米体験を中心に

楊 韜

1. はじめに

本稿は、1930年代の中国人ジャーナリスト鄒韜奮^{すうとうふん}(1895 - 1944)のイギリス、ソ連、アメリカなど欧米諸国での体験を通して、近代中国知識人の西洋理解を考察するものである。20世紀初頭から、中国に入ってきた西洋思想は大量かつ多様であった。鄒韜奮もさまざまな海外思想に接したに違いない。しかし、ジャーナリストとして多忙な毎日を過ごした鄒韜奮が、系統的に西洋思想を研究したのは1933～1934年のおよそ二年間だった。鄒韜奮は、この二年間、欧米各国での研究と体験を経て、次第に1930年代半ばの西洋思想と社会情勢への理解を深めた。これは、彼が中国の将来の方向を摸索する旅でもあった。

本論へ入る前に、鄒韜奮とその活動について簡単に紹介しておく。鄒韜奮は近代中国のジャーナリスト、生活書店創始者、救国会の幹部活動家として知られる。彼は1895年11月5日に中国福建省に生まれ、本名は鄒恩潤、韜奮は筆名の一つである。上海セント・ジョーンズ大学²を卒業後、中華職業教育社で週刊機関誌『生活』の編集に携わり、1926年主編（編集責任者）となる。彼は、読者からの投書を重視する編集で若い知識人層から支持を集めた。1931年の満州事変以降、鄒韜奮は時事問題への関心を強める。1932年、鄒韜奮は中華職業教育社から独立し、生活書店を創設、引き続き週刊誌『生活』を発行した。同年『生活』は中国の雑誌において、最高の発行部数（15万部）を記録する。1930年代には『生活』、『新生』、『大衆生活』など生活書店発行の雑誌で抗日の論陣を張りながら、上海で都市知識人の救国運動に参加した。1936年には、救国会の幹部として逮捕され（「抗日七君子事件」）、8ヶ月間に渡り入獄する。抗日戦争期には、武漢、重慶、香港などを転々としながら、生活書店の支店を全国に50ヶ所以上も築き、全国的な販売網を完成する。また、全国展開を効率的に行なう経営システムを確立し、中国における近代型出版業の一つのモデルを

作り上げた。現在の三聯書店はその後身である。1938年6月から1940年末まで、救国会の一員として国民参政会（国民政府支配下の民意聴取機関）に参加し、抗日と民主主義のために活躍したが、反動化が強まったため、香港に逃れた。香港滞在中、新聞『華商報』に評論を書くと共に、自ら新聞紙『生活日報』を発行、国民党支配の反民主的実態を暴露した。無党無派を標榜してきた鄒韜奮は、1944年7月24日の死の直前に中国共産党への入党を申請し、死後入党を認められる。

鄒韜奮はジャーナリストとして、当時の雑誌、新聞において大量の論評記事を書いた。他には、単行本の論文集や訳書も数多く残している。鄒韜奮研究にあたっては、ほとんど彼が書いた文章が研究対象になっている。彼の残した論評記事や論文、訳書は、ほぼすべてが『韜奮全集』に収められている。『韜奮全集』は、上海人民出版社が1995年に出版した14巻全集である。延べ800万字の『韜奮全集』には、年代順で第1-10巻が鄒韜奮の論評記事、論文を収録し、第11-14巻が鄒韜奮の訳した学術書と小説を収録している。他には、「韜奮年表」、「韜奮編著、翻訳書リスト」、「韜奮のペンネーム一覧表」なども収録している。『韜奮全集』の出版は、体系的な鄒韜奮研究を可能にする価値をもつ。本稿の執筆に用いたのは、この『韜奮全集』である。

2. 中華民族の道を辿る旅

まず、鄒韜奮の1933年7月の出国から1935年8月の帰国までの二年間の足跡に簡単に触れておこう。1933年9月30日に、鄒韜奮はイタリア、スイス、フランスを経て、ロンドンに着いた。そして、1934年2月にロンドンから出発し、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツなどのヨーロッパ諸国を歴訪した後、4月にロンドンに戻った。同年7月から9月までソ連を訪問した。そしてロンドンに戻って、翌年5月にアメリカに渡った。8月にサンフランシスコから上海へ向かい、8月末に上海に着いた。この二年間の経歴について、1944年に鄒韜奮は『患難余生記』のなかで、「視察や研究で得たものとして、『萍踪寄语』第1集（イギリスを中心に）、第2集（ドイツを中心に）、第3集（ソ連だけを）、『萍踪憶語』（アメリカだけを）を書いた」（『韜奮全集』第10巻 832）と記録している。また、鄒韜奮は「偶然に周恩来先生は私との会話で『萍踪憶語』に言及した。彼は集めた材料がこれほど内容充実して分かりやすく意味深いアメリカの全貌に関する本はないと褒めてくれた」（『患難余生記』第一章、

『韜奮全集』第 10 巻 833 頁)と書き、この時期の成果が大きいと自慢している。

海外滞在期において、ロンドンには鄒韜奮の一時的な拠点となっていた。彼は、ヨーロッパ諸国を訪問した以外に、大体ロンドン大学での聴講と大英博物館の図書館での研究に没頭した。のちに帰国した鄒韜奮は、当時の読書ノートを整理して、『読書偶訳』という編訳書を出版した。それを見ると、彼がどのような本を読んで研究していたかが分かる。『読書偶訳』は、「はじめの言葉」に続いて、「政治組織の理論と形式」、マルクス理論、ヘーゲルと弁証法、ヘーゲルのマルクスへの影響、マルクス経済学、エンゲルスの生涯と仕事、レーニンの生涯と理論などのトピックを含んでいる。この『読書偶訳』の内容について、鄒韜奮は「はじめの言葉」で次のように述べていた。

本書はノートにまとめられた英語メモの翻訳書であり、系統的な社会科学書ではないが、全書に貫く筋道はある。(中略)本書で取り上げ訳したのはこれらの思想家(マルクス、エンゲルス、ヘーゲル、レーニン)に対する他の人が書いた解説である。さらに深く掘り下げて研究するためにはこれらの思想家の著作を精読しなければならない。(『韜奮全集』第 14 巻 16 頁)

これを読むと、鄒韜奮がこの編訳書を出版した目的がわかる。彼は、「私は平凡な新聞記者であり、少し思想を研究するのは記者としての仕事のためである。(中略)もしかして自分と同じように仕事に没頭している友人たちも、忙しい中で思想に関する資料にざっと目を通そうとするならば、本書は読んでみる価値があるかもしれない」(『韜奮全集』第 14 巻 20 頁)と述べる。鄒韜奮は『読書偶訳』の各部で、紹介した資料や論文の原著者名、著作名、出版社、出版年なども記載していた。また、鄒韜奮は読者に西洋思想を紹介する際に、理論と実践を結びつけて一緒に考えることが重要だとの姿勢を示す。そしてもう一つ触れたいのは、記事を書く場合、小説を訳す場合と同様に、読者が読みやすいものにするため、鄒韜奮の工夫である。彼は、『読書偶訳』の「あとがき」で「私が常に注意したのは、出来る限り分かりやすくすることであった。さらに、読者にとって分かりやすいだけでなく、読みやすく、おもしろさも感じてくれるなら、何よりの喜びである」(『韜奮全集』第 14 巻 175 頁)と書いた。そのために、鄒韜奮は友人の李公朴に頼んで、「未来の読者」として読んでもら

い、わかりにくい箇所を訳し直した。

西洋思想の理論を研究した鄒韜奮は、積極的に資本主義体制のヨーロッパ諸国や社会主義体制のソ連へ出かけ、自分の目でそれぞれ異なる社会を観察した。『萍踪寄語』、『萍踪憶語』から見ると、鄒韜奮はヨーロッパ諸国の政治、経済体系から、新聞出版業界の現状、一般庶民の生活までの各側面を観察した。また、ソ連での訪問は、モスクワ夏季大学を聴講した後、南部の工業地帯と集団農場を見学した。アメリカでは、南部の人種問題にも関心を示した。鄒韜奮は自分が見た諸国の現状をエッセイの形で国内の読者に紹介した。では、彼はどのような心情でそれを観察し、どのような気持ちで紹介していたか。『萍踪寄語』第1集の「弁言（まえがき）」で、次のように述べている。

これらの「寄語」は散り散りばらばらのエッセイであるが、観察研究の際に、また執筆の際に、記者（鄒韜奮）のこころの中でいつも二つの質問が浮かんでいた。一つは世界の大勢はどうか。いま一つは中華民族が生きていく道は何か。中国は世界の一部であるため、中華民族の出口を研究しようとするなら、全世界の大勢はどうなっているかに留意しなければならない。（『韜奮全集』第5巻 613-614頁）

これは、鄒韜奮が自分に対する問題と言うより、読者に提起した問題と言った方がいいであろう。すなわち鄒韜奮は、このような世界現状の紹介を通して中国の将来に関する問題を提起し、国内の読者と共同の議論を展開しようとする。だから、彼は「（私見を）とりあえず保留する」（『韜奮全集』第5巻 614頁）と書いて、民衆の問題意識を高めようと考えた。ソ連、欧米諸国での体験は、鄒韜奮の思想転換には重要な作用があった。しかし、彼が意識して努力したことは、彼自身だけの变化ではなく、国内の読者にも働きかけて、思想意識の向上を果たそうとしたことである。これは、まさに鄒韜奮のジャーナリスト的特徴だと言えるだろう。

3. ラスキ、フェビアン協会についての認識

鄒韜奮は自らの研究や翻訳によって、ラスキとフェビアン協会を知った。そして、新聞記事などで積極的に中国の読者に紹介していた。さらに、社会や政治問題を分析、評論する際に、ラスキとフェビアン協会の理論を頻繁に利用していた。鄒韜奮は『ソ連の民主』というイギリス学者パット・スローン（Pat Sloan）

の著作を翻訳した。その著書の中で、パット・スローンはフェビアン協会のウェップ夫妻の論文などを引用している。同時に、ラスキもよく『ソ連の民主』に言及していた。概して、鄒韜奮はラスキの思想については自ら直接に研究したが、フェビアン協会についてはラスキや『ソ連の民主』を通して知ったと思われる。

鄒韜奮が最初にラスキに言及したのは、1932 年 11 月 5 日の『生活』第 7 巻第 44 期に発表した「呻吟」編者附言」という読者への回答記事であった。当時、『生活日報』を創刊する予定が取り消された。言論の自由に関する読者からの手紙に回答する際、鄒韜奮はラスキが新聞評論文で鋭い視点で政府要人を批判する例を取り上げた。鄒韜奮は自らの学識が浅いから、「ラスキ教授と比べられない」(『韜奮全集』第 4 巻 469 頁)と謙遜している。また、鄒韜奮は、『萍踪寄語』第 1 集の中で、ロンドンの新聞業について論じた「世界新聞業界の中心」においてでも、再びラスキに言及した。

ロンドン大学政治経済学院の人気教授ラスキは、毎日八種類の重要新聞を読んで、各紙の社説を注意すれば、国際政治や世界大勢をはっきり知ることができる」と述べている。彼のこの話は少々大げさだったかもしれない、畢竟新聞を読む人自身は正確な視点と判断能力がなければ、世界大勢を知るところか、逆に麻痺してますます混乱してしまうだけだろう。しかし、優れた新聞は確かに研究に価する「現代史料」である。(『韜奮全集』第 5 巻 725 頁)

このように、鄒韜奮のラスキへの注目は、初期においては、やはり新聞という彼の常に関心があるところのものとながっていた。無論、鄒韜奮はラスキの政治学者としての言論に注目し、とりわけソ連に関するラスキの論点もしばしば取り上げて、中国の読者に紹介していた。1936 年 6 月に、ソ連の「新憲法草案」が発表された。鄒韜奮は、『生活日報』紙上において、シリーズ記事を出して、多方面から「新憲法草案」を分析、紹介している。そのなかの「拉斯基教授的蘇連憲法観」(「ラスキ教授のソ連憲法観」)(1936 年 6 月 23 日『生活日報』)には、ラスキの「新憲法草案」への高い評価およびその理由を詳細に紹介した。鄒韜奮は、ラスキ教授を現代イギリスでもっとも権威ある政治学者と呼び、「最近彼(ラスキ)のソ連新憲法に対する評価は、世界各国の注目を集めた」(『韜奮全集』第 6 巻 670 頁)と書いた。その後、鄒韜奮は頻繁にラス

キの観点を紹介しながら、自らの主張を示した。例えば、『全民抗戦』第 143 期（1940 年 10 月 26 日）の「戦争中の民主政治」（「戦争中の民主政治」）、「諸葛亮和阿鬪搏闘」（「孔明と阿鬪の戦い」）（1941 年 6 月 22 日『華商報』）、「反民主的幾種煙幕」（「反民主の何種類かの煙幕」）（1941 年 7 月 19 日『華商報』）など時評記事でラスキの理論を引用した。なぜ鄒韜奮はラスキのソ連に対する考え、および民主についての彼の観点をこれほど重視したかについて、郝丹立は次のように指摘した。「鄒韜奮の判断は 1 つの前提に基づいたものである。すなわち、議会制政治の創始国の著名な教授としてのラスキが示したソ連式民主への肯定と評価は、高い価値を内包している。つまり、ソ連式民主と欧米式民主の間には、はっきりした差異が存在しているが、二者の間の差異は両者の民主性の程度の高低によるものであるからだ」（郝丹立 281 頁）。このような前提が鄒韜奮の中にあったかどうかは別にして、当時の鄒韜奮にとって、欧米諸国とソ連のそれぞれの民主主義を視野に入れ、それらを如何に中国に応用するかが彼の第一の関心事であっただろう。

ソ連の民主制を全面的に知るために、鄒韜奮はパット・スローンの『ソ連の民主』を訳して、1939 年 3 月に生活書店から出版した。訳書の中に、「ソ連新憲法」も収録した。鄒韜奮は「訳者序」の中で、この本を訳す目的を次のように述べていた。

我が国には「他山の石以て玉を攻むべし」という古語がある。全国民を動員して抗日運動を展開しつつ建国に向かっている今日、ソ連式民主の方法と成果は我々の参考になる。本書を紹介する価値の所在が、（訳す）ことの主要な原因である。（中略）イギリスは「議会政治の母」と呼ばれている。だから、民主政治を論じる時、この資本主義の国を忘れてはいけない。ソ連は最新型民主政治の発源地であり、その新憲法はイギリス政治学権威のラスキ教授も世界中でもっとも民主的憲法だと評価している。新、旧民主の差異はどこにあるかというのは、研究価値がある面白い問題である。（『韜奮全集』第 14 巻 320 頁）

鄒韜奮は、『ソ連の民主』の著者パット・スローンの特別な経歴がその著作の価値を高めると考えていた。すなわち、パット・スローンはイギリス人の政治学者であり、しかも彼は五年間にわたってソ連で生活していた。彼によるイギリスとソ連の政治体制の比較は、とても意味深い議論になると鄒韜奮は考えた。さらに、当時ソ連をファシズム国家イタリア、ドイツと同一視する言説に対し

て、鄒韜奮は『読書月報』第1巻第4期(1939年5月1日)の書籍紹介文「蘇連的民主」(「ソ連の民主」)でこう書いた。「一部の人はソ連の プロレタリア 執権 を誤解歪曲して、ソ連が大衆を抑圧するイタリアやドイツと同じ独裁的国家であると言う。これは、困惑させることである。また、『ソ連は世界中もっとも民主的な国』と聴いたら、ますます研究する必要があると考えるだろう。この本は皆がこの問題を研究するのに最高の資料である」(『韜奮全集』第9巻106頁)。この紹介文の中で、鄒韜奮は全書の要点を紹介し、最後に中国の現実と結びつけて、国民大衆の政治参加を呼びかけた。

ラスキは英国フェビアン協会の中堅的人物であるが、『ソ連の民主』の翻訳を通して、鄒韜奮はウェッブ夫妻などフェビアン協会に属するほかの人物とその思想に接することができた。鄒韜奮はラスキやフェビアン協会を通して、イギリスとソ連のそれぞれの民主制を比較し考察した、また彼自身、イギリスとソ連の両方での滞在経験もあった。この二つによって形成した鄒韜奮の民主制に対する認識や理解はいったいどのようなものであったかを次に考察する。

4. 英国とソ連に対する比較

イギリスとソ連の国家体制や社会の現状について、鄒韜奮は『萍踪寄語』第1集と第3集で詳しく描写した。その内容は政治体制だけではなく、経済、教育、文化、女性問題など多くの面に渡る。例えば、イギリスに関しては、各都市の特徴、ロンドンの貧民窟、女性の地位、新聞の自由度など各側面から社会の様子を描き出した。また、ソ連に関しては、工場と農場の管理、保育所と中絶病院、発電所などを広い範囲で観察して記事を書いた。大量の記事のなかに、両国の政治体制について論じたものもあった。それは、イギリスの議会政治に関する「巴立門的母親」(「議会政治の母」)(『萍踪寄語』第1集)とソ連の政治を全面的に概説した「關於蘇連的一般的概念」(「ソ連に関する一般概念」)(『萍踪寄語』第3集)の二篇である。

イギリス国会における議員たちの厳しい批判、或は議員と閣僚の激しい論争という「紳士の戦争」に対して、鄒韜奮は高い関心を示した。そして、この「紳士の戦争」の歴史を考察した後、鄒韜奮は「議会制民主政治」が存立する前提をこう考えた。

根本的な大前提は、この制度の中に政局勢力を左右する最大多数の者がい

ること、そしてこの最大多数者が当面の政治経済制度に対して実際に同意する必要があることである。（『鄒韜奮全集』第5巻 756頁）

鄒韜奮は「議会制民主政治」が存立する前提を与党多数決という要素にあると考える。しかし、鄒韜奮の本当の関心点は「議会制民主政治による、資本主義から社会主義への移行という革命の目標がイギリスで達成することが出来るかどうか」（『鄒韜奮全集』第5巻 756頁）という点にあった。彼はイギリス労働党の政治活動を具体例として取り上げた。鄒韜奮は、資本主義の根本制度を改革しない限り、労働党の社会保障制度の実現には到らない、さらに社会主義建設の目標など遠い「夢」だと指摘した。そして最後に、鄒韜奮は貴族問題、王室問題など解決しなければならない多くの問題を抱える「議会政治の母」である国イギリスが、どこへ行くかという問題に視線を転じた。この時の鄒韜奮は、社会主義への移行がどのように出来るかを考えていた。イギリスのような伝統的な議会民主制国家も彼の考察対象であった。実は、鄒韜奮が尊敬するラスキにとっても、これが彼の思考を一時的に行き詰まらせた問題であった。小笠原欣幸は「1930年代、ラスキの主たる問題意識は、議会制民主主義の体制内で社会主義を実現することが可能なのかという点に集中した」（小笠原 194頁）と指摘している。小笠原の分析によれば、ラスキは人間の理性に信頼をよせることで漸進的な社会主義の実現を期待していたが、イギリスの1931年の政治危機や労働党政府の経験から、支配階級が自発的に権力の座から退く可能性は低いとした見解を表明せざるをえなくなった。また、杉田敦も、ラスキが1925年ころまでにレーニン主義的な考え方に接近し、1930年代以降さらにマルクス主義に傾き、資本主義国家を倒すには強力革命によるしかないと主張したことを指摘している。ただ、ラスキは晩年において「こうした路線を反省し、『同意による革命』、すなわち世論の理解を得て議会で多数派となることによって社会主義に移行するという穏健な考え方に回帰した」（杉田 1654頁）と杉田は述べている。ラスキのこのような思想変化は、その時代の政治学者たちの社会科学理論における探索の一例とも言えよう。鄒韜奮における民主主義に対する認識過程もこれと似ている。特に、新生ソ連の民主制は世界各国の知識人に思考のヒントを与えた。それに伴う強力革命の方法についての思考も、鄒韜奮の探求の旅における重要な課題になった。

イギリスと全く異なる政治体制をとるソ連についての考察は、鄒韜奮にとっ

て重要な課題であった。鄒韜奮はおよそ二ヶ月のソ連での訪問から得た結果をいくつかの側面に分けて取り上げた。まず、ソ連の社会構造と社会主義、共産主義の問題について、鄒韜奮は以下のように述べる。

今現在のソ連の社会構造は、共産主義社会ではなく、社会主義社会のスタートにしか過ぎない。共産主義社会の状況は「各人が能力に応じて働き、各人が必要な分を取る」ということである。今のソ連社会はこの理想に程遠いものであることは、彼ら自身も正直に認めている。(『韜奮全集』第 6 巻 276 頁)

鄒韜奮は、社会主義社会のもっとも重要な特徴として、生産手段の公有、つまり工場・機械・交通・炭鉱・森林などすべてを社会が所有し、すべての利益も国民大衆に享受されるということなどを挙げ、当時のソ連社会を共産主義社会と呼ぶことは誤りであると指摘した。なぜなら、ソ連社会においてはまだ衣服、用具および貨幣などを個人が所有しているからだ。続いて鄒韜奮はソ連共産党と国民大衆の関係の問題に言及し、「ソ連は土地が広く人口が多い国である。もともと国民の知識教育レベルが低く、落後した農業社会であるために、のんびりと締りのない国民性が顕著である。現在のように一つの共同目標に向かって勇往邁進したのは、共産党を中心力とする指導があったからだ」(『韜奮全集』第 6 巻 277 頁)と述べた。この考えには、孫文の三民主義思想との共通性が窺える。つまり、鄒韜奮はソ連の国民性を孫文の言う「一握りのバラバラの砂」のような中国国民と同列に扱い、国民大衆の代表者として党の指導が不可欠であると考えたのである。さらに、鄒韜奮は社会主義と階級の関係にも言及する。

社会主義の目的は、階級が存在しない社会を作り出すことである。私たちはソ連が「工場労働者の国」、政権は工場労働者を中心にした人々が握っていると知っている。これは、工場労働者が経済的背景において歴史的使命を負っているからだ。プロレタリア執権期を移行期とし、やがては階級が存在しない社会へ辿り着く。階級が存在しない社会が実現したら、いわゆる「工場労働者の国」もなくなるだろう。(『韜奮全集』第 6 巻 279 頁)

鄒韜奮は「工場労働者」がどのような職種の人々までを含むのか、戸惑いを覚えた。彼は自分が新聞記者であることから、「工場労働者」と称することができかどうかを問題視した。そして、彼はソ連に関する考察を通して、「工場労働者」の意味が次第に変化していくと結論づけた。すなわち、プロレタリア

政権の強化と社会主義建設の進歩によって、「工場労働者」の適用範囲が次第に広がっていく。よって、最初に工業労働者のみを指す限定的意味から、農民なども含む拡大の意味へと広がっていくのである。このときの鄒韜奮にとって、階級が存在しない社会主義社会が理想的な社会として見えた。そのこともこの時期に書いた文章から読み取ることができる。しかしこの段階においてはソ連の社会主義社会は、鄒韜奮にとって考察対象の一つになったとは言え、必ずしも唯一正確のモデルとなったわけではなかろう。なぜなら鄒韜奮にとって、理想的な社会主義社会に移行する過程において、用いる手段が革命か改良かという選択の課題が残っていたからである。

5. 結び

本稿では、主に 1933～1934 年の鄒韜奮の欧米体験を記した『萍踪寄語』、『萍踪憶語』、『患難余生記』を用い、彼の西洋思想及び社会情勢に対する理解について考察した。鄒韜奮は、西洋思想の理論を研究すると同時に、積極的に資本主義体制のヨーロッパ諸国や社会主義体制のソ連へ出かけ、政治、経済体系から、新聞出版業界の現状、一般庶民の生活まで、自分の目でそれぞれに異なる社会を観察した。彼は、ロンドンを拠点としてヨーロッパで滞在し、政治理論を研究し、欧州各国の事情を考察した。そして彼は中国国内の読者向けに、『読書偶記』や『萍踪寄語』など数冊の本を出版し、西洋思想と各国の社会状況の紹介に尽力した。また、彼はラスキやフェビアン協会を通して、イギリスとソ連のそれぞれの民主制を比較し考察した。鄒韜奮にとって、およそ二年間の旅は、中国の将来の道を探る旅でもある。とくに、1930 年代の中国にとって、どのような政治体制を選ぶかというのは、重要な課題であった。鄒韜奮がそのジャーナリストの目を通して見、思索を重ね、新聞や雑誌を通して、中国国内の民衆にも自身の体験を伝えた。こうして、世界現状の紹介を通して中国の将来に関する問題を提起し、国内の読者と共同の議論を展開し、民衆の問題意識を高めようとしたのである。

注

- 1 生活書店：1932 年、鄒韜奮が職業教育社から独立して創設した出版社である。1948 年、読者出版社、新知書店と合併して、生活・読書・新知三聯書店となった。

- 2 セント・ジョーンズ大学：1879 年米国聖公会(Episcopal Church in the United States of America)は上海での二つの聖公会学校を合併して設立した教育機関。1892 年から大学教育課程を始めた。卒業生の中には、林語堂、宋子文をはじめとする中国近代著名人は多い。
- 3 日本における鄒韜奮研究としては、今村与志雄の「あるジャーナリストの誕生 鄒韜奮ノート」、『文学』第 46 巻第 10 号と第 47 巻第 6 号、石島紀之の「抗日統一戦線と知識人 - 「満州事变」時期の鄒韜奮と『生活』週刊をめぐって - 」「『歴史評論』第 256 号と「抗日統一戦線と知識人（後編） - 「満州事变」時期の鄒韜奮と『生活』週刊をめぐって - 」「『歴史評論』第 259 号、斎藤秋男の「《救国時報》と陶行知・鄒韜奮 - “救亡 = 救国” 運動研究のために（2）」「中国研究月報』第 401 号、横山英の「抗日運動と愛国的ジャーナリスト - 鄒韜奮の活動と思想変革 - 」「広島大学文学部紀要』第 26 巻第 3 号などが挙げられる。

主要参考文献

（日本語）

- 小笠原欣幸「ハロルド・ラスキの「同意による革命」論」『イギリス社会主義思想史』都築忠七編（三省堂、1986）：193-218 頁
 杉田敦「ラスキ」『岩波哲学・思想事典』廣松渉他編（岩波書店、1998）：1653-1654 頁

（中国語）

- 郝丹立『韜奮新論：鄒韜奮思想発展歷程研究』（当代中国出版社、2002）
 鄒嘉驥編『韜奮年譜』（上、中、下）（上海文芸出版社、2005）
 鄒韜奮『韜奮全集』1-14 巻 中国韜奮基金韜奮著作編集部編（上海人民出版社、1995）

（英語）

- Gewurtz, M. Speisman. Between America and Russia: Chinese student Radicalism and the travel books of Tsou T'ao-Fen 1933-1937. Toronto: University of Toronto-York University Joint Centre on Modern East Asia, 1975.
 Sloan, Pat. Soviet Democracy. London: Victor Gollancz, 1937.
 Yeh, Wen-Hsin. “Progressive Journalism and Shanghai’s Petty Urbanites: Zou Taofen and the Shenghuo Enterprise, 1926-1945” Shanghai Sojourners. Ed. Frederic Wakeman, Jr. and Wen-hsin Yeh. Berkeley: Institute of East Asian Studies University of California, 1992. 186-238.